地質ニュース600号，53－61頁，2004年8月
Chishitsu News no.600, p.53－61, August, 2004

石の俗称

みちのく石便り（その3）

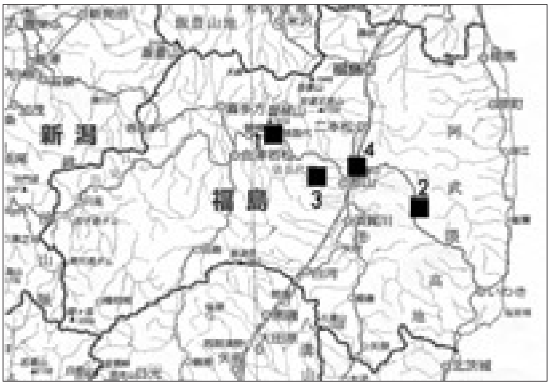
加　藤　碵　一[1)]

今回もまた足の向くまま気の赴くまま，脈絡なくみちのく遠近の石を尋ね回った顛末の一席を申し述べ，読者諸氏の清きお目々を汚しましょう．今回は，福島県の巻で，郡山を基点に回ってみました（第1図）．

1．会津磐梯山は宝の山？

「朝寝，朝酒，朝湯」（断じて筆者の日常ではありません）につられて，まず，福島県は耶麻郡猪苗代町にやってきました．「耶麻郡」という名称は，古く奈良時代中期～平安時代前期にさかのぼり，「続日本後記」にすでに見られます．昨今の町村合併で由緒ある地名などが消えていくことは惜しまれます．さて，猪苗代湖北方に位置する磐梯火山は，「会津富士」とも呼ばれる成層型の火山で，猪苗代湖側からは秀麗な形状を呈しています．いわゆる脊梁火山列に属し，最高峰の磐梯山（大磐梯，1,818m），赤埴山及び櫛ケ峰からなっています（写真1）．火山体の基盤は，新生代第四紀下部更新世の主にデイサイト質凝灰岩の火砕流堆積物からなり，縁辺部には砂・泥などの薄層を挟む背炙山層などが分布しています．火山活動は5期に区分され，第Ⅰ～第Ⅲ期の活動で古磐梯火山が，第Ⅳ～第Ⅴ期の活動で新磐梯火山が形成されました．第Ⅰ期には，輝石安山岩溶岩が流出し，火山角礫岩が堆積し，第Ⅱ期には，輝石安山岩・スコリア流～軽石堆積物などが堆積して，赤埴山・櫛ケ峰の下部を形成しました．第Ⅲ期には，主に安山岩溶岩が流出し，赤埴山上部・櫛ケ峰中部を形成しました．第Ⅳ期の活動で，古磐梯火山南西部が水蒸気爆発で崩壊し，岩屑（泥）流堆積物が当時の日橋川をせき止めて猪苗代湖の原形が生じたのです．この時，爆裂火口中に新たに溶岩が流出し，新磐梯火山を形成しました．第Ⅴ期には小規模な火山活動が生じましたが，主に山体崩壊が続きました（日本の地質「東北地方」編集委員会，1989）．

さて，有史時代の災害記録は，明治の噴火の前は大同元（806）年のもので，ともに水蒸気爆発型の噴火活動でしたが，特に明治21（1888）年7月15日の小磐梯の噴火は470人以上が死亡するという大



第1図　位置図（図中の番号は本文中の節の番号と一致）．

写真1　磐梯山遠景（南方より）．

1）産総研 東北センター

キーワード：見祢の大石，猫石，亀趺，弁慶の硯石，殺生石，蛇枕石，カボチャ岩，きのこ岩

写真2　猪苗代町西円寺境内の「磐梯山破裂罹災死没之墓」(福島県).

惨事を引き起こしました．この際の噴出物には，本源物質は見られず，山体構成物からなる火山砕屑物でした．小磐梯山北半分が消失し，U字形の爆裂火口を形成しました．低温乾燥状態で高速移動した砕屑流の平均速度は約80km/時と推定され，総体積$1.5km^3$，分布面積$3.5km^2$（守屋，1985）に及ぶ大規模なもので深刻な被害の原因となりました．これら多くの犠牲者を慰霊するモニュメントが各地にありますが，写真2もその1つです．猪苗代町新町の西円寺境内にある安山岩製の「磐梯山破裂罹災死没之墓」で，明治22（1889）年の建立と記されております．真偽の程は保証できませんが多分磐梯山の安山岩を用いたものでしょう（写真2）．

当時帝国大学の関谷清景教授らを始め，多くの専門家の調査やマスコミ報道がありましたが，この火山災害を語る際に忘れてならないのが，次に述べる一宗教家による実践的な調査・救援活動です．

それは，田中智学（本名 多田巴之助，1861～1939）のことです．彼は，江戸日本橋の医家に生まれ，10歳で剃髪得度して智学の法名を得ましたが，後に還俗し立正安国会を創立して在家主義による宗教活動を推進しました．磐梯山噴火の報道に接し，仏教者としてこのような災害に処すべき社会奉仕活動について思うところがあり，写真師を連れて罹災地を調査・慰問し，その結果をもとに幻燈映

写真3　「見祢の大石」遠景．

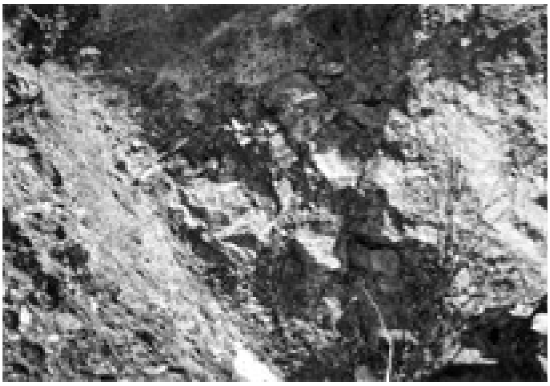
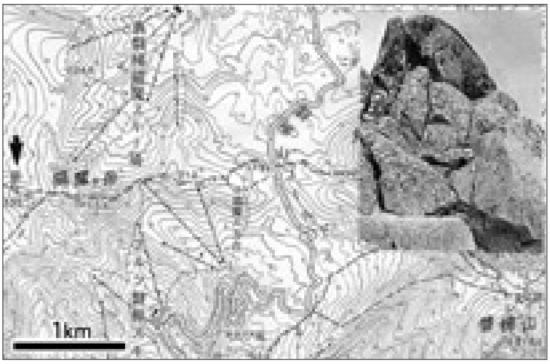


写真4　「見祢の大石」近景．

写会を催して義捐金を募って現地に送りました．読売新聞から視察の紀行文を依頼され，「磐梯紀行」と題して明治21（1888）年8月5日から10月6日まで30回にわたって掲載され，多くの反響を呼びました．その後平成11年～平成12年にかけて読売新聞福島版に連載された「新磐梯紀行」の加筆出版（小桧山，2000）に復刻されていますので，詳しくお読みになりたい方は合わせてご覧ください．

さて，その「磐梯紀行」5回目にでてくる大石が，今日いうところの「見祢（みね）の大石」なのです（写真3，4）．磐梯山東方，赤埴山麓に位置する見祢村は，14名の死者を出しましたが，そこにある巨石を智学一行が見つけて，噴火のすさまじさをアピールする上で絶好の被写体であると考えました．村人に由来を尋ねたところ「噴火時に山頂から飛んできた」と答えたそうです．智学自身は，「土石流に押し流されてきたのではないか」と正しく推測していたといいます．実際，噴火時に，山上の火口付近にあった輝石安山岩の岩塊が火山泥流で南方麓に約5km

写真5　猪苗代町の「猫石」（小桧山，2000より）．
左：磐梯国際スキー場近くの「猫石」．
右：国道115沿いの「猫石」．



第2図　猫魔火山の「猫石」（地形図は1/50000「磐梯山」）．

運ばれたものだったのです（この噴火以前の火山活動に由来するとの説もあります）．石の大きさは，長径9.9m，短径6.06m，高さ3.03mで，当時の写真では大部分が地表に現れていましたが，現在では写真3のようにかなり自重で沈下しています．それでも巨大なものです．昭和16（1941）年に国指定の天然記念物となりました．

さて，「磐梯紀行」6回目には，「猫石」がでてきます．現在，磐梯国際スキー場を上っていったところにあり，猫が臥しているように見えるので名づけられたものです．見えますかね（写真5左）．この石は，昔盛んであった養蚕の大敵である鼠を退治する霊力があると信じられ「赤猫大明神」として敬われていたそうです．智学はさらにこの石から南東方にも「猫石」があることを言及しています．猪苗代湖町から国道115号線を福島方面に向かい伯父ヶ倉集落を抜けてすぐの道路左の林中にあるそうです（写真5右）．これら2つの「猫石」には次のようないわれがあります．昔，磐梯山噴火時に逃れてきた夫婦の猫のうち，雄猫は長瀬川で力尽き，雌猫は川を渡ったが白木城の林で息絶えたというものです．それらが石に化したというのでしょう．旧暦4月12日には地元で猫石の祭りが催され，養蚕家は繭を鼠に食われないように酒をささげて祈願します．「磐梯紀行」には記載されていませんが，猪苗代町土町（はにまち）にも「猫石」があるそうです．こちらは，昔，たくさんの猫がこの岩上に群がってひなたぼっこをしながら眠ったという伝承があり，石上には，「磐梯山災死者招魂」碑が建てられています（小桧山，2000）．ついでに言うと，土町は，次に述べる保科正之と土津（はにつ）神社を守り，祭事を行う人々の集落でした．したがって会津藩時代には，猪苗代城代直轄地であったため，年貢や賦役は免除されていた特別の地でした．

さらについでに言いますと，磐梯山の西方約5kmに位置する猫魔火山にも「猫石」があります．この火山は頂上部にカルデラを持つ開析の進んだ火山地形をなし，外輪山に沿っては格好のハイキングコースとなっています．東縁部の猫魔ヶ岳（1,403.5m）の西方にやや出っ張ったように連なる大きな岩塊が「猫石」（1,335m）で，山名の由来である化け猫伝説に因む俗称です（第2図）．独峰状を呈しているので，かなり遠方からも見えて良い目印になります．猫魔火山は，上述の新磐梯火山の活動期にはほぼ活動を停止（約34,000年前）しましたが，主な活動様式は，中心噴火でした．噴出物は，大部分ピジョン（ピジオン）輝石質岩系に属する安山岩です．カルシウムに乏しい輝石であるピジョン（ピジオン）輝石が含まれ，上部マントル起源の本源マグマの結晶分化作用によって形成されたと考えられています．

2. 猪苗代湖と北岸部

JR猪苗代駅は海抜520.8mに位置し，明治32（1899）年に開業．猪苗代湖は，四季折々の風情に溢れた磐梯山を湖面に映し出すことから，天鏡湖とも称され，日本で3番目の大きさを持つ淡水湖です．周囲55.31km，最大深度95.3mで面積103.9km^{2}です．猪苗代湖東方の奥羽山脈の一部をなす川桁・額取山地西縁の直線状急斜面は，断層崖で，ほぼ30万年前ころまで，東側隆起の断層

写真6　土津神社前景.

活動が続きました. したがって, 原猪苗代湖ともいうべき猪苗代盆地は断層角盆地だったわけです. 更新世後期の7～8万年前頃, 猫魔岳方面から流出してきた火山性泥流堆積物で流出口を塞がれたため湖面が標高530m付近まで急上昇し, 3～4万年前頃最も湖面が広がり, 古猪苗代湖が形成されました. 北岸部は, 大量の砂礫を堆積してデルタ状の地形をなしました. 最終氷期後期の3万年前頃から, 湖水域は縮小していき, 結果的に約20m湖面は低下し, 現在見られるような湖成段丘や扇状地などが周囲に発達していきました. というのが, 地形・地質学的な猪苗代湖形成史ですが, 会津藩士向井吉重編纂の「会津旧事雑考」には,「猪苗代湖は大同二(807)年に出現した」とあるそうです. この年に, 湖水が出現し多くの村が水没したため, 時の朝廷は空海を派遣して磐梯山の魔性を沈め山麓に慧日寺を建立したと伝えているのです. しかし, 湖畔の縄文遺跡で魚網の錘石が発見されており, 当時すでに湖が出現していたことは考古学的にも明らかです. 空海も前年に中国から帰国して九州に滞在した後, この年上京しており, 会津にいたわけはありません. ガセネタです. 大同二(807)年を特別な年とする宗教伝承はあちこちにありますが, ここでも意図的に猪苗代湖形成をこじつけたものでしょう(猪苗代湖の自然と歴史・文化を考える会, 2003).

さて, 猪苗代湖北方すなわち磐梯山南麓に位置する土津神社は, 赤埴山中腹に鎮座し, 徳川秀忠の第四子で, 会津藩祖の保科正之(1611～1672)を祀っています(写真6). 延宝三(1675)年, 正之の遺命によって建立されましたが, 戊辰戦争によって焼失し, 明治7(1874)年に再建されました. 司馬遼太郎の小説「王城の護衛者」の冒頭に「会津松平家というのは, ほんのかりそめな恋から出発している」とあります. 秀忠は, 歴代徳川将軍の中で唯一といっていいほど側室を持ちませんでした. 正室のお江与(いよ)の方が極めて嫉妬心が強かったためでもあります(筆者にはよく理解できます). しかし物事には, すべて例外があります. 奥女中のお静の方を寵愛した結果, 生まれたのが正之でした. 母子及び一族は, お江与の方の追求に対し身の安全を図るため大変苦心しました(小桧山, 2001). 後年, 彼が制定した「家訓十五カ条」の4番目に「婦女子の言, 一切聞くべからず」とあるのは, これがトラウマになっていたのではないかと勘ぐられます. 筆者の家庭では, このような暴言は許されるはずもありませんが. 境内にあるのが写真7の土津霊神碑です. 本シリーズの「亀と石」(加藤・遠藤, 2001)をお読みの読者にはおわかりと思いますが, これは「亀趺(きふ)」と呼ばれるものです. 元来は中国で特定の人物の業績を記した碑である「行状碑(ぎょうじょうひ)」に用いられた様式の1つなのです. 延宝二(1674)年に完成したこの「亀趺」は日本最大といわれます. 正之の経歴を記した竿石の碑文は山崎闇斎が文を選したもので, 1,943字からなります. 書き記したのは当時能筆家として著名な上高庸(かみこうよう)(土佐左兵衛高庸)で, 一字の大きさは約9cm四方です. 正之のよく

写真7　土津霊神碑全景.

写真8　「亀石」(土津霊神碑の台石).

知られた業績の1つが，江戸在府時の玉川上水建設で，現在でも役に立っています．竿石は，高さ約6ｍほどで，ここから約16km西方に離れた八田野(現在の河東町)から，人夫3千人を要して運んだといわれています．採石地は確認できませんが安山岩で，位置からすると第Ⅳ期の火山活動に由来する押立・大磐梯溶岩類でしょうか．台石は，高さ約0.9m，長さ約5.1m，幅約3.2mで亀の形をしています．土町の東から運ばれたものです．とすると，赤埴火山噴出物の一部で第Ⅲ期の火山活動に由来する更新世中期の輝石安山岩溶岩でしょう．この台座の「亀石」は，最初南向きに据えられていたところ，夜になると眼下に見える猪苗代湖の水を飲みにいってしまうので，北向きに据え直したといわれます．なかなかいかつい顔の亀です(写真8)．足から判断すると陸亀ですね．

土津神社から西方に足を進めます．猪苗代駅前の観光案内所でもらったパンフレットに「弁慶の硯石」「殺生石」があると書かれていたからです．しかし，なかなかみつかりません．もちろん看板も何もなく，村人に聞いても誰も知りません．夕方暗くなり時間もなくなりあきらめかけたときに，小川で野菜を洗っている老婆にだめもとで尋ねたところ，昔見たことがあるといいます．しかし何度聞いても正確な位置はわかりません．最後のチャレンジで林の中を歩き回ったところ，やっとそれらしい石が見つかりました(写真9，10)．パンフレットの写真とよく似ているのでたぶんこれでしょう．そういうことにしましょう．パンフレットで宣伝するなら，看板ぐらい出しとけよと言いたくなります．まあ，そんな物好きは少ないからでしょうか．「弁慶の硯石」は，直方

写真9　「弁慶の硯石」.

写真10　「殺生石」.

体状の安山岩塊で，後方にある安山岩塊が「殺生石」でしょうが，何の変哲もありません．ともに磐梯山の火山噴出物の単なる転石(安山岩)です．地質学的には，何の意味もありませんが，それぞれ若干のいわれがあります．「弁慶の硯石」は，源義経が兄の頼朝に追われ奥州に落ちのびて行く途中で，この地を訪れたそうです．そして，その景色のあまりの美しさに魅せられ，絵にとどめようとして弁慶にこの石で墨をすらせたと言います．さて，いわゆる「殺生石」は各地にありますが，もっとも有名なのは，下野那須野(現栃木県那須湯本)の湯川の奥の硫黄が湧出する賽河原に位置するものです．遣唐使吉備真備の帰朝とともにやって来た金毛白面九尾の妖狐は，天竺では摩羯陀国(まかだこく)斑足太子の妃華陽婦人となり，唐では殷の紂王の妃妲妃(だっき)となり，日本では鳥羽天皇の寵姫玉藻前となって人を悩ましたといいます．しかし，ここで安倍泰成に看破され，三浦介義純と上総介広常に討ちとられ石に変じたそうです．その後も近づく人々や鳥獣，虫魚をもと

第3図　大多鬼丸関係の遺跡と鍾乳洞位置図（博多，1969に加筆）．

写真11　あぶくま洞入り口付近と古生代二畳紀の石灰岩からなる崖．

り殺しました．実際は，付近に噴出する硫化水素などの有毒気体が原因です．最後に曹洞宗の禅僧であった玄翁（源翁）和尚の法力で応永二（1395）年に打ち割られたと言います．この伝説は室町時代初期佐阿弥安清の切能「殺生石」によって巷間に広まりました．さらに江戸時代後期に読本作者高井伴寛の『三国妖伝』や歌舞伎の近松梅枝軒と佐川藤太の合作『玉藻前曦袂（たまもまえあさひのたもと）』によって広く流布しました．ここの石質は黒色の輝石安山岩です．この時打ち割られた「殺生石」が四方に飛び散ったかけらの1つがここにあるというわけです．那須からここまで，直線距離で約55kmありますから，法力のエネルギーというのはすごいものです．発電に使えないものでしょうか．

3. 鍾乳石は石の俗称の宝庫

今度は，郡山からJR磐越東線で東方へ向かいました．というのは，菅谷駅と神俣（かんまた）駅間の東側には，第3図に示したように有名な2つの大鍾乳洞があるからです．普通列車で1時間余りの行程です．

その1つの「あぶくま洞」は，田村郡滝根町（たきねまち）菅谷にあり，後述する「入水鍾乳洞」の南方約4kmに位置します．昭和44（1969）年に古生代二畳紀（？）の滝根層群に属する石灰岩の採石場跡から発見され，昭和48（1973）年から公開されました（写真11）．公開部分は約600mですが，未公開部分はさらに2,500m以上あるといわれ，東洋一の規模と称されています．石灰岩は，白亜紀後期の花崗岩類の接触変成作用を受けて結晶質石灰岩（大理石）になっている部分もあります．洞内には，「滝根御殿」「龍宮殿」「月の世界」「こうもりの窟」「せせらぎの間」という支洞があり，「魔人の白櫛」「滝根富士」「地底の精霊」「滝根の斜塔」「妖怪の塔」「樹氷」「クリスマスツリー」「きのこ岩」「クリスタルカーテン」「ボックスワーク」「白磁の滝」など数多くの石筍や鍾乳石があります（第4図）．洞内は写真撮影禁止なので，残念ながら順法精神に富む筆者としてはこれらの写真をお見せできません（もちろん本当に撮影していないという意味ですよ）．観光パンフレットから「きのこ岩」を紹介しておくにとどめましょう（写真12）．洞内の「竜宮殿」と呼ばれる高さ約13mの空洞部壁面は，流下する地下水から析出した石灰分が滝のように見える「フローストーン」で覆われていますが，そこの斜面上に成長した凹凸に富んだ石柱です．未公開部分には，高さ45mの日本一の「フローストーン」があるそうです．また，コウモリの住処としても有名で，このような観光鍾乳洞で，コロニーを作っているのは珍しいことだそうです．

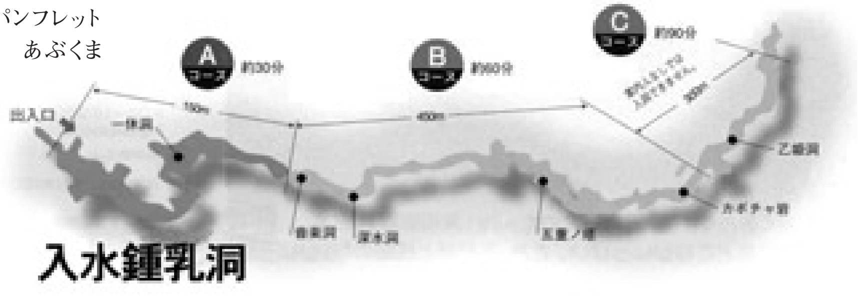
第4図
あぶくま洞公開部分（あぶくま洞観光パンフレット「鍾乳洞なるほどガイド」一部に加筆）.

写真12　「きのこ岩」（あぶくま洞観光パンフレット「鍾乳洞なるほどガイド」より）.

同じく田村郡滝根町菅谷にある「入水鍾乳洞」は，カルスト台地である仙台平（せんだいだいら）麓を洞口とし，洞内の最大天井高は30mに達する国指定天然記念物です.「あぶくま洞」と同様に古生代二畳紀（？）の滝根層群に属する石灰岩からなり，一部白亜紀後期の花崗岩類の接触変成作用を受けて結晶質石灰岩（大理石）になっています．洞窟内には「五百羅漢」「マンモス岩」「こうもり岩」「クルミ岩」「アルプス岩」を始めとする様々な奇勝があります（第5図）．こちらも洞内は写真撮影禁止です．洞窟の公開部分は，A・B・Cコースに分割されており，最深部のCコースは，予約して案内人の付き添いが必要です．ここの鍾乳石の売りは，他では見られない「カボチャ岩」でBコースの最奥部にあります（写真13）．また，内部にはカルスト川が流れ，多くの滝がかかっています．本鍾乳洞は，曲がりくねった部分と直線状部分（音楽洞～深水洞間）がありますが，後者は，砂岩や泥岩などの堆積岩がやはり白亜紀後期の花崗岩類の接触変成作用を受けて変成してできたホルンフェルスが直線状に延びており，これが侵食に強いためそれに沿って洞窟が形成されたためです.

写真13　「カボチャ岩」（あぶくま洞観光パンフレット「ふたつの宇宙に会えるまち　あぶくま洞」より）.

第5図
入水鍾乳洞（あぶくま洞観光パンフレット「ふたつの宇宙に会えるまち　あぶくま洞」一部に加筆）.



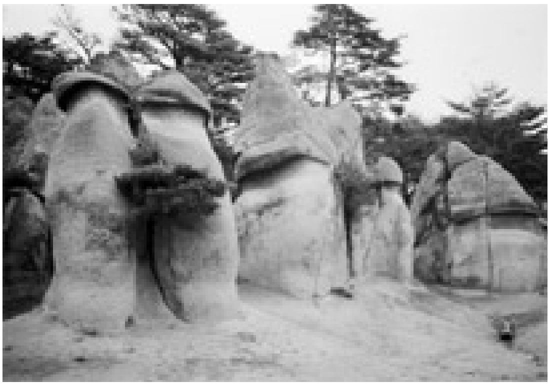


写真14　浄土松公園(郡山市)の「きのこ岩」.

写真15　カッパドキア(ギョレメ)の「きのこ岩」(トルコ).

さて，滝根町一帯は，かつて陸奥国〜日高見の国に属し，蝦夷の種族が居住していたため「東夷の地」と称されていましたが，有名な古戦場でもあります．桓武天皇の延暦年間に征夷大将軍坂上田村麻呂が，大滝根山(1,193m)北側の石灰岩洞の1つである「鬼穴」に住む地方豪族大多鬼丸を討伐したと言います(第3図)．朝廷から見れば，反抗する地方豪族は敵であり，当然逆賊となるわけですから征伐の対象になるのです．しかし，歴史というものは見る立場によって何とでも解釈できるもので，客観的な記述はきわめて困難ですね．大多鬼丸(他に大竹丸とか大高丸とも称される)にしてみれば，長年にわたって朝廷から収奪されてきて，非は朝廷側にあるとして反抗したわけですが，最終的には戦いに敗れ妻とともに自害してしまいました．まさに，「勝てば官軍，負ければ賊軍」です．ところで，今は見られませんが，「鬼穴」内部の「八畳敷き」と称された高さ七〜八尺，四方二間ばかりの室には，「大多鬼丸の腰かけ石」があるそうです．もちろん石灰岩製でしょうね．

4. 浄土松公園の「きのこ岩」

福島県指定の名勝及び天然記念物(昭和33(1958)年指定)である「浄土松山」は，「浄土ヶ浜」(陸中海岸にもあります，別の機会に紹介しましょう)「浄土ヶ岡」とも呼ばれ，また，白い岩石と松の緑の美しいありようから「陸の松島」「水無き松島」とも称されています(郡山市逢瀬町多田の字浄土松1-1)．承和七(840)年，芦野中丸という長者が，自然の景勝地に人工の美を加えて造園したことに始まると言い伝えられているそうです．郡山駅から西方へバスで30分あまりの標高315mほどの丘陵部に位置します．江戸時代には，二本松藩主丹羽氏が，春秋にここを探勝したといわれ，そのため「浄土松お成り」という言葉が残っているそうです．付近に分布する新第三紀の堆積岩類は，本来，水平〜緩傾斜ですが，部分的に断層による変形を受け，浸食地形が発達しています．それの典型が，写真14の「きのこ岩」です．白色の茎の部分は，侵食に弱い軽石凝灰岩で，かさの部分は粗粒凝灰岩〜凝灰角礫岩で，表面は数cmほど風化して黒く変色しています．こうした奇岩はここだけではありません．もっと大規模で有名なのが，写真15のトルコ内陸のカッパドキア地方にあります．ここは，凝灰角礫岩からなっています．かさの部分は溶岩かと思っていましたが，現地で観察した限りでは黒色(塩基性)の凝灰角礫岩です．最近は日本からの観光客も増え，ずいぶん施設などが整備されてきました．ここには，「らくだ岩」があり，稿を改めて紹介しましょう．「浄土松公園」から郡山市に戻る途中には「静御前堂」があります．源義経を慕って奥州へ下り，悲嘆のあまり池に身を投じた静御前の霊を祀ってあるそうです．天明年間に改装されましたが，そのとき釘を一本も使わなかったそうです．義経や弁慶ゆかりの石や遺跡は各地にたくさんあり，これらもまとまったらご紹介しましょう．

5. 蛇枕石

JR東北本線郡山駅の北隣りが「日和田駅」です．

写真16　「蛇骨地蔵堂」前景．

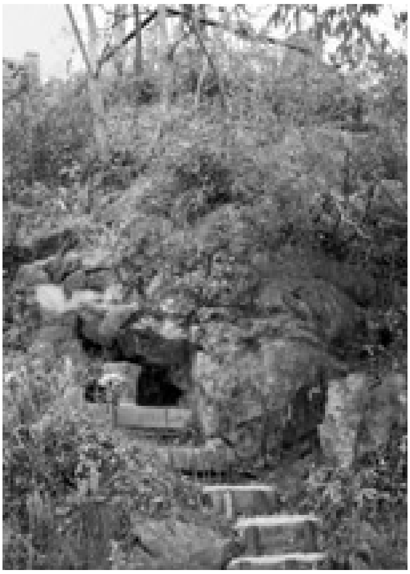


写真17　「蛇枕石」付近．

この近傍に「蛇骨地蔵堂」があります（写真16）．養老年間（717～724）の創建と言われています．明治9（1876）年に廃された東勝寺の祈願堂でした．平成12（2000）年に，郡山市重要有形文化財に指定されました．その昔，日和田の城主安積氏の娘を家来（といっても親戚関係でしょうが）の安積玄蕃時里というものが妻にしたいと願いましたが，あまりの乱暴者であったため断られてしまいます．時里は怒って姫を館から追い出し，他のものを皆殺しにしてしまいました．姫は「死に変わり生き変わって仇を討つ」といって館近くの安積沼に身を投げます．その後，姫は大蛇に変身しこの地方を荒らしまくります．困った近在の者たちは毎年村娘を人身御供として差し出すことにしました．とんだとばっちりですね．安珍清姫の有名な話もありますが，一部（と信じたいですが）女性の情念というか怨念というか，その深さというか凄まじさというか，ただただブルブルするのみですね．さて，33人目に当たった娘の親が長谷観音に祈願したところ，その法力によって蛇は骨を残して消え去ったそうです．その骨で地蔵尊を彫り祀ったのが「蛇骨地蔵堂」のいわれだそうです．堂の裏手には，人身御供にされた女性になぞらえた33体の石製観音像が安置されています．「蛇枕石」の碑がありますが，石そのものは見当たりませんが，この地蔵堂敷地のJR線路よりに写真17の露岩があります．姫が変身した大蛇が，この石を抱いてよく寝ていたそうです．相当大きい（長い）蛇だったのでしょう．一部ノッチ状の凹部に小さな地蔵が祀ってあります．地質学的には，新第三紀の安山岩質の火砕岩でどうということもありませんが．「蛇の石」については，以前本欄でもご紹介しましたので（遠藤・加藤，2001），ついでがあれば御笑覧ください．

では，本日はここまで．またの御目文字を．

参　考　文　献

遠藤雄二・加藤碵一（2001）：「蛇の石」．地質ニュース，no.568, 62-63.

博多信文（1969）：鬼穴物語「大多鬼丸」（自費出版）．37p.

猪苗代湖の自然と歴史・文化を考える会（2003）：湖育む-語り継ぐ猪苗代．歴史春秋社，202p.

加藤碵一・遠藤祐二（2001）：「亀と石」．地質ニュース，no.563, 61-69.

小桧山六郎（2000）：新磐梯紀行．歴史春秋出版株式会社，311p.

小桧山六郎（2001）：保科正之と土津神社．歴春ブックレット26，歴史春秋出版株式会社，71p.

日本の地質「東北地方」編集委員会（1989）：日本の地質2東北地方．共立出版株式会社，338p.

守屋似智雄（1985）：磐梯山1888年の噴火-崩壊．地質と調査，2, 20-27.

小形信夫（1976）：陸中の伝説．第一法規出版株式会社，187p.

KATO Hirokazu (2004)：Popular named stones/rocks in Tohoku District, Northeast Japan.

＜受付：2003年12月24日＞